椿の兵隊さん

（風土記から）

東京女子高等師範學校教諭兼教授　石井庄司

一

豐後國風土記、大野郡海石榴市、血田の條に左のやうな一節がある。

「昔者、纒向の日代の宮に天の下知らしめしし天皇、球覃の行宮に在しき。仍りて鼠の石窟の土蜘蛛を誅はむと欲し、群臣に詔して、海石榴樹を伐り採り、椎に作りて兵とし、すなはち猛き卒を簡み、兵の椎を授け、山を穿ち草を排き、石室の土蜘蛛を襲ひて悉に誅ひ殺し給ひき。流るる血、踝を沒れき。その椎を作りし處を海石榴市といひ、又血流れし處を血田といふ。」

豐後國風土記の成立年代に關しては、種々の異說もあるが、今日では、所謂古風土記の一で和銅六年の詔によつて撰進されたものといふことになつてゐる。日田・球珠等諸郡の抄本が傳へられてゐる。刊本としては、寛政十二年に荒木田久老の校訂したものが最も古い。今は武田祐吉博士校訂の岩波文庫本に據つた。

此の記事は、日本書紀卷第七、景行天皇の十二年の條にも見えてゐる。鼠の石窟には二つの土蜘蛛がゐて、青といひ白といふ名であつたとある。なほ鼠の石窟は、速見郡北石垣村にあつて、大野郡ではないといふことである。

風土記に、「纒向の日代の宮に天の下知らしめしし天皇」とあるのは、景行天皇のことである。球覃の行宮は、書紀には「來田見の邑」とある。直入郡に球覃の鄕といふのがある。其處のことである。

「海石榴樹」は椿の木で、和名抄には豆波岐とある。「椎」は槌である。「兵」は兵器・武器といふことで、兵士の謂ではない。「兵の椎」は、兵器たるところの椎といふことで、兵隊と椎との意味ではない。「踝」は足のくるぶしのことである。

風土記の記事は、例の如く、海石榴市と血田の二ヶ處の地名傳說である。地名の出來た所以を語つてゐるのである。ところが此の話の中には、多分に子供向の話の要素が入つてゐる。强敵を攻めるに當り、椿の椎といふ無生物が大きな働をするのである。椿の樹或は花は、南方の暖國を

思はせる植物であり、子供には最も親しみのある樹である。なほ椿の木は堅牢である爲、それで椎を作る。その兵器としての椎が大功を奏することになる。椎は、石窟を破壞するための武器であつたのであるが「山を穿ち草を排きし」といふやうにも書かれてゐて、特別の働をしてゐるのである。原文の「兵」は勿論上述記すが如く、兵器・武器の意味であるが、全文の意味からすれば單なる兵器以上の神祕的な働をしてゐるので、子供に話す場合には、兵士、卽ち兵隊さんと云ふやうにする方が興味があると思ふ。事實神祕的な存在なのであるから、人間の形を持つたものと見た方が、子供の理解を助けることと思ふ。椿の兵隊さん——赤い帽子をかぶり、青い服を來て、劍をさげたといへば、椿の花や葉の模樣も髣髴せしめられるのである。

たゞ始めから椿の兵隊を繰り出したといふよりは、何か特殊の事情により、特殊の働により兵隊となつて進むと見る方が面白いやうに思はれる。さういふ點だけを取り出して、子供向に作り替へたのが、次の小話である。原話の精神だけは、何とかして傳へたいものと思ふ。切に大方の御叱正を乞ふ。

二

むかし、むかし、ある山の中に土蜘蛛といふ惡いものどもが住んでゐました。惡ものの大將は青大將と白大將といふ二人で、大勢の家來を引きつれてゐます。そして鼠の石窟といふお城にたてこもつて居りました。

狹いお城にあんまり大勢の家來が入りましたので、みんなチュチュない、チュチュないと鼠のやうに泣いて苦しがりました。そして、大將は、

「チュチュめ——チュチュめ——」

と號令をかけます。鼠のやうにす早く駈けまはるので、戰爭には決して負けたことがありません。

第十二代の景行天皇といふお勇しい天皇が、この惡ものどもを退治するためにお出かけになりました。

天皇は大勢の家來をつれておいでになつたのですが、何しろ鼠の石窟といふ敵のお城は、高い高い山の中にあつて、なか〳〵攻め落すことが出來ません。

その上敵の兵隊は、青と白とかはるがはるいくらでも繰り出してきます。さすがの皇軍もしばらく戰の樣子を見合はせることになりました。

或る日の事、天皇は山の麓の椿の木の下で休んでおいでになりました。つや〳〵とした椿の葉つぱの中には、まつ赤な花がたくさん咲いてゐました。天皇は、この花を御覽になつて、

「このきれいに咲いてゐる椿の花が、みんな兵隊になつて、家來になつてくれたら、よいがな」

と獨り言のやうにおつしやいました。

そのとき、風もないのにまつ赤な椿の花がぴよんと枝から飛び降りたかと思ふと、すぐ一人の兵隊さんになつて、天皇の御前に立ちあがりました。

青い軍服に青い靴、まつ赤な帽子を被つて、敬禮をしてゐるかはいゝ兵隊さんです。

すると、また高い木の枝から、ぴよんと一つの花が飛んで降りて、かはいゝ兵隊さんになりました。それから、ぴよん、ぴよん、ぴよんと、あちらの枝からも、こちらの枝からも、かはいゝ兵隊さんが降りてきました。青い軍服に青い靴、まつ赤な帽子を被つた兵隊さんが大勢現れてきました。

氣ヲツケ！

右ヘナラヘ！

ナホレ！

番號！　一、二、三、四、五、六、七、……百、二百、三百、四百、五百……と、千人もゐます。それから、進めおい！とごん〳〵進んでまゐりました。

鼠の石窟の方では、青い軍服に青い靴を穿いたかはいゝ兵隊さんですから、きつと味方の兵隊だらうと思つてゐる中に、椿の兵隊さんはごしごし、敵の石窟に攻めこみました。そしてかくして持つてきた爆彈や手榴彈をバン〳〵と投げ込みました。惡ものどもは不意を打たれて、チュチュない、チュチュない。逃げろ、逃げろと逃げて行きました。

椿の兵隊さんは、鼠の石窟の上に、日の丸の旗を建てました。

そして、みんな揃つて、

テンワウヘイカ、バンザアイ、

テンワウヘイカ、バンザアイ

と三唱いたしました。

（をはり）

（附記）「チュチュない」は鼠の鳴聲を擬し、意味は窮窟なること。また困ること。